日本書紀傳 廿三卷之三

七十六

和書 一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (85)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教育者文庫印

故素戔嗚尊立化奇稲田姫爲湯津爪櫛而揳於御髻乃使脚摩乳手摩乳醸八醞酒幷作假庋假庋。此云佐受枳。八間各置一口槽而盛酒以待之也至期果有大

一二六八三號

蛇頭尾各有八岐眼如赤酸醬。
赤酸醬。此云阿箇箇鵝知。松栢生於背上而
蔓延於八丘八谷之間及至得
酒頭各一槽飲醉而睡時素戔
嗚尊乃拔所帶十握劍寸斬其
蛇至尾劍刃少欠故割裂其尾
視之中有一劍此所謂草薙劍
也。草薙劍。此云倶娑那伎能都
留伎。一書曰。本名天叢雲劍
蓋大蛇所居之上常有雲氣故
以名歟。至日本武皇子改名曰
草薙劍

素戔嗚大神の大蛇を平治(タヒラ)〳〵げさせ御在〳〵坐けるハ
其脚(初)摩乳手摩乳神ハ頼まれ奉〳〵れさせ御在〳〵坐け
るハ起りたる御事ハハ渡〳〵せ給へれども又此御政
ハ就てハ奇稲田姫命を后神と定めさせ御在〳〵坐す
御事ハ至〳〵せ給ひ又其ハ依てハ愈其御心ハ思ひ〳〵
定めさせ給ひて大蛇を殺させ給りむ御設共頻ハ行
備へさせ御在〳〵坐て終ハ其皆ゞひ詔給へるが如く
平治〳〵げさせ給ひけるハ其中尾を斬〳〵せさせ給へ
る時其御劔ハ當る物有り奇怪〳〵御在〳〵坐て割裂
て見行ハせさせ御在〳〵坐〳〵りバ奇異ひハ神靈〳〵き

寶劔をあむ見當〳〵せ給ひけるハ下ハ素戔嗚尊曰是神
劔也吾何敢私以安予乃上獻於天神也と見え第四、一
書ハ素戔嗚尊曰此不用可以吾私用也乃遣五世孫天
之菖根神上奉於天此今所謂草雉劔矣と有り又古事
記ハも故取此大刀思異物而白上於天照大御神也是
者草那藝之大刀也と有が如く其御許ハ私ハ留めさ
せ御在〳〵坐ずして天神の御許ハ上獻〳〵せ給ひける
是ハて上章第三、一書ある再昇天の御事御在〳〵坐す
所ハ是後素戔嗚尊曰諸神逐我我今當永去如何不與
我姊相見而檀自徑去歟迺復扇天扇國上詣于天と有

が如き清明き御志操の御程顕れさせ御在〻坐けるを事右の檀自徑去歟と有と此ハ吾何敢私以安子と有とを考合せて其大神の御心を明〻め奉る可くあむ有けるを然れハ右の檀と此の私とハ相照〻て其清明き御心の百千が一も見奉り知べき所ハ有て謂ゆる字眼とも云べき程の所ある事ハ傳二十二卷三百四丁ハ其檀字の事を註すハ就中委〻く辨たるが如〻熱田縁起ハ此〻り取れる文〻〻ハ素戔嗚尊曰是神劔也何敢(秘)私秘藏乎獻於天照大神也と有と私以安子を私秘藏(秘)と換たり偖右ハ引る古事記ハ白上於天照大御神也の白上ハ白而上(理)給比伎と訓べき所あるハて白ハ大蛇を殺〻て其得給へる曲を日神ハ奏聞〻其劔ハ私ハ以安(オキ)綜〻き物と〻て此を上獻〻せ給ふ御事ありあり若て樋河上天淵記ハ素戔嗚尊奉劔天照大神大神曰我屏天岩屋時落此劔江州伊布貴山是我劔也と有が如く本〻り皇大神の御物ハて此御劔の起原ハ傳十五(二百七十)十八(三十三)十九(百六十)ハ云るが如〻古語拾遺大石窟段ハ今天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸(古語佐那伎)と有るハ其刀ハて實ハ其時招實(ヲキシ)と爲て天香山之五百箇眞坂樹ハ鏡と瓊と此大御劔とを取繫〻れたりつ〻を其時ハ取落させ給へるを其氣吹雄命と云ける神の我有と〻て秘藏〻持たりける

を其大蛇と(化)成て脚摩乳手摩乳神の子を取喫ひ盡〻

て終ふ其神をも併せ滅ぼさむと爲つゝと此大神の
事向さゝせ御在ゝ坐ける故ふ今まて世ふ埋れたゝ
神劔の靈威再復顯りれて皇大神の大御許ふ還ふ給
へるふ就ても皇大神の御爲ふ取ても此天下國土の
爲ふ取ても比類無き大き御功と申す者ふて御名
ふ負せる武速素戔嗚尊と申奉る可畏き御稜威の見
ハわさせ御在ゝ坐る所ふれハ大蛇の事ハ天神の御
上ふ係て申奉る可きあゝねども彼大御鏡と此大御
劔と二種を併せ奉りて掛まくも可畏き皇御孫尊の
大御祖と御在ゝ坐す天照大神素戔嗚尊の大御靈と

爲て天地と日月と共ふ無窮き天津日継の大御靈と
定まゝせ御在ゝ坐ける大御功ふむ此ふ立せさせ御
在ゝ坐ける斯れハ史籍ふ傳ゝすと雖も其御使と
爲て奉ゝ給へる時の御返言ふも皇大神の大御命
を懇到ふ仰せ進ゝせさせ御在ゝ坐て猶此顯國ふ留
まゝせさせ給ひて國土を御經營爲させ給ふ可き由
共を委ゝく仰含め奉ゝせふと爲給ひゝ上章第
三一書ふ今則奉覲己訖當隨衆神之意自此永歸根國
生と有る如き其御辞見の御詞を奉ゝせ給ひつゝも
其御詞ふハ似氣無ゝて自然ふ然御在ゝ坐つ可き

時勢とハ申奉りあぐゝふ其奇稲田姫命を后神と成給ひ又其后神と共ふ住せさせ御在ゝ坐む爲ふ更ふ須賀宮を作ゝせ給ひて永ふ其國ふ御在ゝ坐べき御儲の御政を物爲させ給ふ事彼遂ゝれ奉ゝれさせ給へりゝ此大神の檀ふ私ふ行ひ物爲させ給ふ可き事非りけれバ其將天照太神の大御心(ふ)を御心と爲させ給へゝふあむ御在ゝ坐べ(うつ)めれバ此ふ於て正ふ其考無くてハ得有べゝゝぬ事とぞ所思ゆゝ然れハ此ふ彼大蛇を事向させ給へゝ御政ハ此大神の御上ふ取て世の涯あゝ御大業ふ渡ゝせ給へゝが故ふ

甚如此ゝも委ゝく詳ゝふハ語継ぎ云継ぎ終ふ書典ふ收めて記ゝ傳へさせ給ひけゝゝ予己く思ひけゝく

させ給ひけゝ御事ハ此國(土)人民ふ(臣)害を成す一怪物を平治ゝけさせ給へゝあれけれバ其御功甚大ふりと雖も此大神ふ合せてハ何計の御事ふ御在ゝ坐ぢ(ざ)ゝむを然事ゝゝく傳へさせ給へゝ者ふゝふ膳臣巳提使ぶ虎を打殺ゝて其子の仇を報いたゝゝ大ふの異ハこゝゝハ有けめ同ゝ趣あゝけゝ者(おと)と思ひ取て然のゝ右ふ云ゝゝ如き所以を深く探索ゝざりけゝこゝゝ今思へバ中ごゝあゝ麁略ふゝ學ひ樣ふハ有けれと悔の八千度臍を噛む思ふむ止ざりけゝを(予)(せ)ふハ予が(先)共の心の如くあゝ人の多ゝゝむを入紐の同ゝ心ふ諾ふゆ信ふハさゝや知ざれども人の云ひ思ふ所ふ抱ゝゝ可き事ゝハと後進の爲ふ驚ゝゝ云事ふふ偖此ふ標たゝ文ハ其大蛇を亡ぼさせ給ふ御設と又此大神の其老公と老婆との語申す言ふ合せて

大蛇を打見給へるに果して然有けるを終に割き屠殺し給へる御事とを載るれたりけるが先に其二神の語申せし語を首うれたるは御紀の例
に拠て事を簡易に物為〳〵習に依れる者にして奇
らしらすと雖も今此事を註すに又其父を挙ず
は有べうもなきなり其〳〵上七十に出せる古事記の九丁
尓速須佐之男命詔其老夫是汝之女者奉於吾哉云〻
の文に引續ける其上に亦問汝哭由者何答白言我之
女者自本在八稚女是高志之八俣遠呂智毎年来喫今
其可来時故泣尓問其形如何答白彼目如赤加賀智而

身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜榲其長谿谷八谷峡八
尾而見其腹者悉常血爛也此謂赤加賀知者今酸醬者也と云文有り
此に八今此以童女臨被呑無由脱免故以哀傷と有る
下に其大蛇の形狀を語る語の次めて有べき所なり
を次に其退治の所に至期果有大蛇頭尾各有八岐眼
如赤酸醬赤酸醬此云阿箇箇鵝知松柏生於背上而蔓延於八丘八
谷之間と有は其老夫婦の云所に合せて信然有けり
と此大神の打見行はしし所を宣へる所なるが故に
至期果の語は有なり又古事記に上に語申す所を
具に記さるし故に下には如此設備待之時其八俣遠

（第三の書ハ彼大蛇毎頭各有石松西腸有山甚可畏矣と語申す事有れども足ハざるあり若て）

呂智信如言來と有て其同じ事を重ね載られざるふて此ふハ上を略き彼記ハ下を事略りわたる者ふふむ有けゝ但此ふ蔓延於八丘八谷之間の下ふ其腹皆爛壞の五字を漏されたり熱田縁起ふ依て補ふ可し偖又其ハ始の御問對の御事を天淵記ふ書せるふハ而後還長者原問曰其蛇何形對曰甚可怖也八頭八尾如參天枯木也眼如日月光輝上下牙如交劒戟毒氣如火(蹈)焰其ハ舌如紅其大齊各出窟則洪霧煙起如火鳴響と有ハ又異なる傳なりと雖も中ふハ然もこうと所思しき事無ふ非わバ又此をも捨ずして事實を徵す一

徵

ふハ備ふ可きなり但右ふ還長者原問曰とハ其上文ふ素戔嗚尊先欲隱此女去者七里構八重墻於佐草里隱女於其中于始詠三十一文字和歌曰云〻と有て此時ふ其奇稲田姫命を佐草里ふ幽置して老夫婦の許ふ還來坐る趣なれとも紀記共ふ其童女を湯津爪櫛ふ取成して搖せ給へること見えたりけれ佐草里ふ隱すと云りし事違ふ可く又彼ハ雲神詠も此より後ふ須賀宮作らしと御時の事ふて有けれバ其も違へり又其長者と云るハ其始ふ素戔嗚尊被譴雲州云〻於越經大原郡福武坂莊到ハ頭坂麓長者但有老翁嫗中坐女女而泣と有る其二神の家を云なり出雲社記ふも仁田郡佐田村與大原郡(久)中久野村堺有ハ頭坂斬ハ岐蛇處也と云れども其ふて ハ安藝國可愛之川上と云るふ合されバ信ひ難りり

右ふ天淵記ふ書せるも其大蛇の形容を知ふ使宜と成る事有べし甚可怖也ハ第三の書ふ汝是可畏之神と大神さへふ大蛇ふ勅給へる御事の御在し坐せハ

（第三書ふも西腸有山甚可畏矣見れ）

實ニ然こそ有つゝめ如參天枯木也と八頭八尾ハ
て大虛を翔巡る狀あむ然こそ有けゝ（其枯木と云へ
るも景行天皇十八年御紀ニ時有僵木長九百七十丈
焉と有れバ此ハ蔓延於八丘八谷之間と有ハ思合す
可し眼如日月と有ハ此ハ如赤酸醬と云ハ其眼の赤
くこたゝる形を云ひ右ハ如日月とハ其廻（ら）めく狀を
云ふ光輝上下とハ其眼光の物を射ると云ふ牙（如）
交劔戟とハ其齒牙の交利ハゝて信ハ然見えつるハ
ゝ可し毒氣如火焰と（其舌如紅血走りて）ハ二十二社註式奥入ハ正一位
油日大明神（江州甲賀郡）圓融院御宇當所有大蛇惱人民依

之橘敏保朝臣爲勅使令參向之退治彼大蛇然處自口
吹炎昇天飜虛空射矢不立頗無可退治之術計仍祈當
山之處種々有奇瑞而遂殺畢彼山之頂如油火顯光赫
々仍件大山之麓始而建立社壇奉号正一位油火大明
神と有ハ彼ハ岐大蛇ハ比べてハ物ハも非ざめれも
自口吹炎と有ハ思合す可し又其毒氣の事ハ仁德
天皇五十五年御紀ハ謂ゆる田道臣の化れるを（即）有大
蛇發瞋目墓出以咋蝦夷悉被蛇毒而多死亡と有る
是ハ其大齊谷と八此ハ松栢生於皆上而蔓延於八
丘八谷之間と有ハ第三一書ハ両脇有山と云程の事

△又其下ハ東岸盤渦ノ底有ニ大窟圓点其中測ニ水色黑ニ而無滴水蓋蛇窟宅云とも見えたり

△推古天皇十六年御紀ハ謂ゆる霹靂木を伐る所ハ雷神即化ニ大魚ニ以授樹枝即取魚焚之と見え又

あれば其八頭八尾ある其間合ある所即谷ハ齊ーゝりーを云あり出窟ハ其上文ハ樋河の事を先云て又去此河上二里有餘有深溪即大蛇之窟宅也と有り

是を云て其本國の高志より此ハ通ひ栖る處ある可き事上五十七丁ハ云るが如ーー但常陸風土記行方郡條ハ夜刀神相群引率悉盡到來左右防障令勿耕佃俗曰謂蛇爲夜刀神於是麻多智大起怒情著被甲鎧之自身執仗打殺云ゝ中駈逐中略其後中壬生連麻呂略初占其谷令築池堤時夜刀神昇集池邊之椎樹經時不去中略即令役民日目見雜物魚虫之類無所憚懼隨盡打殺言了應時神蛇避隱と有が如く斯る

類ハ隱顯出没共ハ奇異ある者ゝ有けれバ其深溪ある窟宅ハ潛める時ハ其身を小さく成ーて住へりーも知べゝざるあり洪霧煙起とハ景行天皇四十二年御紀ハ所見たる日本武尊の膽吹山ハ御在ーー坐たる所ハ因跨蛇猶行時山神之興雲零水峯霧谷曀と衍ハ有が如きハ大蛇の常ある を又上六十一丁ハ云るが如く此ハ岐大蛇と云ハ其氣吹雄命と云ふ神の化れるあれば其出行くハ隨ひてハ雲を起ーー霧を立たりけむハ然も有ぬ可き事ふりーー又如火而鳴響と云るハ雷の如く鳴車渡ると云あり地神本紀ハ寸斬其

蛇此蛇爲八段毎段成雷揔爲八雷飛躍昇天と有が如
く其寸ふ斬〻れたるすゝふ雷と成て天翔る者を況
て其大蛇の雷の如く鳴轟きたりけむハ如何ハ甚し
き事ゐて有けむ但此天淵記ハ大永の頃の奥書有る
今其を立て云ふハ非れども右ふ記せる事共ハ外ふ
も合ふ所有る事右の如くあれバ其大蛇の大凡をも
想像り知べき爲ふ此ふハ古る注せるあり紀記二典
ハ正しき傳なるふ斯る余事ふ及バむハ叢脞しきふ
過たりと思ふ〻むるあれども若く偖又素戔嗚大神
事の打合る上ハ指置き難くてゐむ
の彼大蛇を退治させ御在し坐むと爲て其御事謀の
御有狀ふハ異なる所も無しと雖も其傳〻ふ各〻精
しきも麁きと有て一ふ定なるすゝざるあり此ハ古事記

と熱田縁起の委しきふハ如ざるあり先此の本文を
本として此ふ比校べ其可否を先定む可くゐむ有け
る故此ふ故素戔嗚尊立化奇稲田姫爲湯津仇櫛而挿
於御髻と有を古事記ふ(縁起の文亦此ふ同じきを)も尓速須佐之男命乃於湯津
仇櫛取成其童女而刺御美豆良と有て其趣違ふ事無
く其化字と取成の字ハ同じ訓なる所あり偖古ふ
頭も挿す櫛ふ玉櫛なども云称も所見たりけれバ玉を
以て櫛の裝ひとハ成せりけむを今も此女神をして
其物ふ取化させ御在し坐けるふて上四十六丁ふ引る出
雲風土記ふ久志伊奈大美等與麻奴良比賣命と申奉

れる御名の起り此ゐ在る事ありけり其久志伊奈大
ハ櫛髻(クシイヲ)あり美等與ハ瑞豐あり麻(ヲ)奴良ハ眞瓊在ゐ
と玉と化しせさせ御在し坐けるゐ依れる御名ありし
けれバ此ゐてハ其童女の形を幽して湯津爪櫛と變
さしめ給ひて其害を避させ御在し坐むと事謀しせ
御在し坐ける由其御名の義ゐ合せ曉る可くあむ有
ける天淵記ゐ尓素戔嗚尊計奇計置ハ槽醞舟又作艾
偶女裝之置東山頂其影沈ハ槽大蛇見之以爲眞女使
矯ハ頭飲ハ槽中無女仰見山頂無端呑艾女熱悶と見
えたる如此く有つる者ある可し其奇稲田姫命の見

ゆ計りゐ作裝ひて立せたりけるゐて其艾偶女ゐ
りしある可し此(其)ゐて御紀(此)ゐ立化奇稲田姫爲湯津爪
櫛と有るも甚能聞ゆめり先ゐハ其童女を湯津爪櫛
移して其眞の童女ゐ(の上)ゐ居て其影を酒槽ゐ
給へる事と思ひしハ非りけり其ハ古事記ゐ物爲させ
有る事ハ其變化と云る物ゐて其平國段ゐ故我先欲
取其御手故今取其御手者即取成立氷亦取成劔刃と
と有ハ立氷ゐ變化(リ)劔刃ゐ變化(リ)を云るゐ合
せて此ハ其童女を玉櫛ゐ取化し給へる事を知べし
偖其父女の事ゐ就て思出けるハ年中行事秘抄ゐ
引る別(ゐ)に近衛式ゐ五月五日藥玉料菖蒲蓬艾雜花三
日平旦申内侍司列設南殿前と有る此事延喜近衛式
ゐも見えたるゐ書典ゐハ載すと雖も天下一般の風
として五月五日ゐ菖蒲蓬艾を屋ゐ葺く事ありる其菖
蒲ハ劔ゐ比(ら)ゐ(ら)ゐ可し蓬艾ハ何(ヒ)の爲ゐ(ゐ)て云事を知
ざるハ若くハ彼艾女を作りて大蛇を退治(ヤラフ)させ御在
し坐し吉例を引るゐハ非るゐや皇太神宮儀式帳ゐ

五月五日節菖蒲並蓬等神宮並高宮及諸殿供奉と有
が如く神宮ふすゝ仕奉るを以て古き傳有て然爲習
へる事を知べし偖此艾女の事ふ依て其より以降魔
物あどの其艾を畏るゝ事ふハ成れりけむとゞ所思
えた偖此の次第ハ一ふ醸八醞酒と有ハ古事記ふ故醸
八鹽折之酒と有る是あり然るを第二ノ一書ふ汝以衆
菓釀酒八甕と見えたるハ其料物と釀る狀とを仰示
させ給へるふて甚愛たきを第三ノ一書ふ釀毎酒と有
ハ味氣無き事ふゝ可しニふハ古事記ふ且作迴垣於
其垣作八門と有を地神本紀ハ此ゝ取て然有り緣
起ふハ拜作假庇八間一面開八戸と有ハ右ふ當る可
きが此正書ふ漏たり三ふハ此ふ作假庇八間各置一

口槽而盛酒以待之也ハ古事記ふも毎門結八佐受岐
毎其佐受岐置酒舩而毎舩盛其八鹽折酒而待と見え
地神本紀右ふ同じく緣起ふハ右ふ劣る如く作假庇
八間一面開八戸各置酒槽盛酒待之と有り四ふハ此
ふ至期果有大蛇云ゝ古事記ふハ上ふ其二神の申
せる語ふ在る故ふ此所ふハ其八俣遠呂智信如言來
と有り地神本紀ふハ時八岐大蛇如所言蔓延於八丘
八谷之間而至矣と有り五ふハ第二ノ一書ふ素戔嗚尊
勅蛇曰汝是可畏之神敢不卿食乎乃以八甕酒毎口沃入
其蛇飲酒而睡と有ハ何れの傳ふも無き事ふて甚愛

故隨喜而此設備待之

たゝ此かハ及至得酒頭各一槽飲醉而睡とのミ有り
縁起かハ及至得酒氣八戸分頭飲醉而睡と有り其委
しきあり古事記かも乃毎船垂入己頭飲其酒於是飲
醉酔伏寢と有り此第三一書かハ乃計釀毒酒以飲之
蛇醉而睡と有れども毒酒の事ハ信あひ難りかり如此
を列ぬ見ざる時ハ其次第かを於て飲たる所あむ有べく文
りかければ今註す可き事かてハ有れども云あり心
をあむ著べ〇立ハ諸本共ハ立化を多知那我良と訓
ミ新宮本本かハ其を多知麻知杵古呂尓と訓か然れども天孫
降臨章か中天稚彦の事を矢立死第つ一書かも因以立死ど有あど
ハ立の一字を多知抒古呂尓と訓れば此も右か従ふ

又海宮遊行章第四一書かハ所失之釣針得かハ

可きあり遷却出示神祇詞か天若彦も返言不申氏高津
鳥殃尓依氏立處尓身亡支と有る是あり〇化字ハ新
澤宮本かハ依て登理那志氏と訓べし即古事記かハ尓速
須佐之男命乃於湯津仇櫛取成其髮女と取成の字か
當れる事上九十四丁かハ註るが如し已かハ引る其平國段かハ
然欲爲カ競故我先欲取其御手故今取其御手者即取
成立氷亦取成劔刃と有る取成の字ハ取化と云事か
て此物を變て彼物か化を云る事あれば此ハ其奇稲
田姫命か然る術の御在し坐ざるを此大神の奇異ち
る御所行を以て其女神の形容を易きせ御在し坐て

其八大蛇を退治させ給ふ危ふき御間ハ此を玉櫛と化させ御在し坐て御髻ハ挿せ給へる事上四十六ハ註るが如し然るを度會延佳説ハ此の文を訓て立化奇稲田姫爲湯津爪櫛而と訓て文義明らかあり と云るハ此女神の名義をも説得ずして妄ハ云る者ハて云ハも足ざる者あり〻〻實ハ皇典の罪人と云者あり若此大神の其童女ハ化らせ給へるハハ何とてハ古事記ハ此を於湯津爪櫛取成其童女とハ云む又櫛を作る事ハ〻むハ如何ハして〻ハ諸本共ハ此爲字をしも登理那志久と訓傳ふる事の

有む又古書ハ多く湯津爪櫛を御髻ハ挿せ給ふ事をバ云れども未其櫛を作爲りて挿せ事を云ず理ハも違ひ例共ハも合ハざりける者あり〻〻然るを白井宗因が此訓前人未發の所を發す後學の一助と云べし櫛を作爲して挿給ふ事ハ上代女の鬠と所見て歌ふどハも訓りと云るハ何なら辭心ぢや又通證ハも今按景行天皇御紀所謂日本武尊妻弟橘姫入海而沒ハ壯士之帰レ云と以下ハ事ハ不ス同ノ故ニ今ハ事ハ不ス可シ其論長ケ大今ハ事ハ不ス可シ

○湯津爪櫛ハ傳何の玄神ハ變化せさせ給ふ事有む十百五十ハ云り神名式ハ駿河國安倍郡小梳神社見九十ハ

元乃らハ通證ハ引る駿河風土記ハ小梳神社所祭素戔嗚尊與奇稲田姫也と有ハ先ハ心も留らさりけ

〈次ハ挿於御髻〉云ハ非すや抑髻ハ云ハ男ハ限りたる事ハて已ハ傳ハ云るが如く瑞珠盟約章ハ所見たる天照大神の大夫の武備を設ハ給ハ所ハ乃結髮爲髻ハ有り又神功皇后の征韓の御時ハも便結分髮而爲髻ハ有て下ハ暫假男貌强起雄略ハ有り如く髻ハ男子の貌ハり若此大神の然女神ハ化給へるハ髻ハ云事を何とてハ爲る又化して御身を女ハ化して髻ハ云ハ合ハ非ずや笑ハハ堪ざる僻訓ハり且又

其大蛇を退治させ給ふ危ふき御間ハ此を玉櫛と化させ御在〜坐て御髻ハ挿せ給へる事上四十六ハ註るが如〜然るを度會延佳説ハ此の文を訓て立化奇稲田姫（タチバナミナリテ）（クシ）為湯津爪櫛（ツマクシ）而（ヲテ）と訓て文義明〜らかなりと云るハ此女神の名義をも説得ず〜て妄ふ云る者ふ〜て云ふも足ざる者あり〜實ハ皇典の罪人と云者あり若此大神の其童女ハ化〜せ給へ〜むハ何とてハ古事記ハ此を於湯津爪櫛取成其童女とハ云む又櫛を作る事ふ〜むハ如何ハ〜てハ諸本共ハ此為字をも登理那志久と訓傳ふる事の

△次ハ挿於御髻云ハ非ずや抑髻云ハ男ハ限りたる事ハて已ハ傳五十六ハ云るが如〜瑞珠盟約章ハ所見たる天照大神の大夫の武備を設き給ハ所ハ乃結髮ハ為髻云有り又神功皇后の征韓の御時ハも便結分髮而為髻云百て

ハ髻云事を何とるハ為る又化して髻の御身を女ハ化して髻のこを稚男ハ化ハ行合ふ非ずや笑ハ堪ざる僻訓あり且又

有む又古書ハ多く湯津爪櫛を御髻ハ挿せ給ふ事をバ云れども未其櫛を作為りて挿（サシ）（ケ）事を云ず理ハも違ひ例共ハも合ハざりける者あり〜然るを白井宗因が此訓前人未發の所を發す後學の一助と云べ〜櫛を作為して挿給ふ事ハ上代女の鬠と所見て歌ふどハも訓りと云るハ何なる僻心ぞや又通證ハも今按景行天皇御紀所謂日本武尊解髮化童女以密伺川上梟師蓋意同と云れども彼ハ壯士を怖れ近附ざりし故ハころ然る童女とも成て伺りせ給へるハ有けれ此ハ大ハ饗をして待設させ給へるハ何の女神ハ變化せさせ給ふ事有む○湯津爪櫛ハ傳十百五十九丁ハ云り神名式ハ駿河國安倍郡小梳神社見元乃るハ通證ハ引る駿河風土記ハ小梳神社所祭素戔嗚尊與奇稲田姫也と有ハ先ハ心も留〜さハけ

ろ事あれども今思ふに必然ゝ可き所由有ゝ事あり
け〳〵同式ゝ同郡神部神社見えたり風土記ゝ日本（神郡云〻）
武尊驛此護持神劔故号有神部号神部神社則日本武
尊所祭太神宮也と有り然ゝ其神部ハ此第三ノ一書
ゝ其素戔嗚尊斬蛇之劔今在吉備神部許也と有を地
神本紀ゝ素戔嗚尊十一世孫田〻彦命此命磯城瑞籬
朝御世賜神部直大神部直姓と有ゝ此あれバ右ゝ大
神宮と云ゝハ此素戔嗚尊ゝ御在〻坐ゝ也又右
ゝ神劔の事を云ゝを也思合す可〻又式ゝ足坏神社
風土記ゝ足都幾神社所祭蛭兒也と云ゝハ味耜高彦

根神を出雲國ゝて阿須伎神社と申す具須〻都〻と
の違ゝあるのゝあるを其蛭兒と云ハ後世事代主神を
俗ゝ然申すゝ依て誤れる者あれバ其も由有り又和
名抄郷名ゝ同郡美和と有て式外あれども（ゝ益頭郡神神社）今も三輪
神社（村と云ゝ）御在〻坐ゝあど此一郡の内ゝ右の如く素戔嗚尊（隣郡ゝあれバ得云ぬ由有べく又）
奇稲田姫命ハ小梳神社（と神部神社と）ゝ御在〻坐〻其御子大物主
神其御子事代主神の然御在〻坐ゝ（所ゝ鎮ゝ）ゝ上ゝ又神名
式ゝ有度郡草薙神社坐ハ彼景行天皇四十（年）注御紀ゝ
日本武尊の野火の難ゝ遭せさせ御在〻坐け〻時彼
大御劔の大御稜威を顕ハ〻給へり〻跡所の即神社（自ゝ抽出て）

を齋奉〳〵せ給ふ始と成れるあれば小椅神社ハしも
神代の故事ふ就ても此御劔の御上ふ就ても此上無
く深き御由緒あむ御在〳〵坐す御社ふハ渡〳〵せ給へ
りけるる又式ふ廬原郡久佐奈岐神社風土記ふ東草奈
岐或久佐奈岐草奈岐神社稚足彦天皇元年辛未始祭之奉
官幣と有る是あり備右ふ云る吉備神部の事ふ就て
考るふ景行天皇四十年御紀日本武尊東征條ふ天皇即命吉備武彦與大伴武日連令從
日本武尊と見えたるるふ姓氏録右京皇別下ふ廬原公
笠朝臣同祖稚武彦命之後世孫吉備建彦命景行天皇
御世被遣東方伐毛人及凶鬼神到于阿倍廬原國復命
之日以廬原國給之と有ふ就て思るふ其神部も此吉
備建彦命ふ從ひ下りて此ふ其子孫の遺りて祭れる
ふてハ非るる○御髻ハ美ニ豆良と訓べき事已ふ傳十五百
丁

又百十九丁ふ註るが如し其瑞珠盟約章ふ髻髮を美伊奈
太伎と訓るハ上四丁五丁ふ引る神名式ふ能登國能登郡
久志伊太太伎比咩神社と有も此ふ立化奇稲田姫爲
湯津爪櫛挿於御髻と有が如く御櫛ふ取成して御髻
ふ戴るせ給へるふて此奇稲田姫命と申す御名の起
此ふ在る事なれば此一のミハ美伊奈太伎と訓てむ
とす○挿ハ古事記ふ刺御美豆良と有る是あり万葉
十九二十七丁ふ黄楊小櫛之賀左志家良之催馬樂律の刺
櫛ふ左之久之波。止宇万利名ニ川。安利之加止。太介久
乃掾乃。安之太。尓止利。與宇左利止利。止利之加波。左之

久之毛奈之也。次支牟大知也。新勅撰集ハ且見れと猶
う戀〳〵き吾妹子ヶ湯津の爪櫛如何挿す〳〵」と有ハ通
證ハ此歌を引て重遠曰爪櫛挿髻者古之婚禮婚爲新
婦上髮挿櫛主定之義也と云を擧げ蓋童女垂髮許
嫁而後結髮挿櫛也と註云ハ然ラハ故實の正〳〵く有
けむと所思ゆるを此ハ合ざるあり然ラハ上ハ汝
當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣と有ヶ如く此神ハ奉ら
れたるハ有れども未嫁ひ坐〳〵と云ハも非ず其童
女を御髻ハ挿せる御櫛ハ取成させ御在〳〵坐ゆるふ
れバ此ハ其故實を云べき所あるざるあり然れと
も伊勢

又疑爪櫛本是妻櫛之謂古者男女嫁娶而後但挿櫛而未詳識也と

物語ハ比べ來〳〵振分髮も肩過の君あるすして誰ヶ
上べき」と有を以て見るハ其婚ふ時ハ當りて髮を結
ふ事ハれバ櫛も其時ハ挿ふあり爪櫛ハ妻櫛の義ふ
らむハ實ハ然ラ言ふ者あり士清ヶ言云れたりと
所思ゆ　○八醞酒ハ古事記ハ八鹽折之酒と作ハ私記
ハ一度釀熟絞取其汁弃其糟更用其酒爲汁亦更釀之
如此八度是爲純酷之酒也謂之鹽者以其汁八度絞返
故也今世亦謂一度便爲一鹽也謂之折者以其八度折
返故也是古老之說也と所見たる是實ハ其造製樣を
委〳〵く書〳〵て殘ラ所無キ者あり口訣ハ其ハを切め
て釀八醞酒者以酒釀八度也と云ひ纂疏ハ其ハ言を
說〳〵て八醞謂醇厚酒也和訓八入折蓋八度醞釀猶如

紅色一入再入之類也と宣へり古事記玉垣宮段ハ
鹽折之經乃と云称の所見なりも此ハ同じくして幾
回も練熟ひたる称なりを思合す可し偖此八ハ弥か
て七八の八ハ有べくず此八醞酒と云ハ謂ゆる
酎酒の事と所見なり和名抄酒醴類ハ酎酒説文云酎
漢語抄云豆久利 三重醸酒也西京雜記云正旦作酒八
加信世流佐介
月成名曰酎酒一名九醞通俗文云醞設酒於國家也蔣
云曾 魴坊韻云酸酒再下麹也俗語
比と有り此物の狀ハ私記の説の合へりを思へば
弦醸返酒ハ酎酒ハ一度酒ハ醸りて其
酒ハ再麹を下して後醸りて又其を水ハ用ひて三度麹
を下して醸れりを酎酒と云あり又酸再下麹也と云

ハ其酒を本として二度麹を和して
醸れりを云ハて酸ハ異名と見り偖右の鹽ハ借字ハ
して入ハ其本字なるが其言を推試るハ滄海の潮ハ
るハ對へて江湖ハ阿波字美と云称有ハ潮水ハ鹹味ハ
るハ眞水ハ淡味なる物なるが故なり然るハ海水も
本同じく淡味なる百川の水の會する物ハハ有れ
ども常ハ同じ處ハ居て白浪の八重折る上を天日の光ハ蒸れて止ざるが
故ハ自然ハ鹹味を成して潮水と成れる者なり又其
潮水を汲て海藻ハ灌ぎ或ハ白汐を浸して此を日ハ
干して又其上を幾入も灌浸して愈に天日ハ乾るせる
を水ハ蛮れて煮る時ハ終ハ白鹽と成なり是其潮水の

凝固するかハ有べからず天の火と海の水と地の土と三物の相結ばるる氣互に相釀して成るる所を
れば鹽ハ氣穂(シホ)して其折返し釀し成せる氣(シ)の精妙な
る物なるか故に穂(ホ)とハ云なり是にて鹽(シホ)と入(シホ)との義
明らかなるなり若て色に入(シホ)と云ハ其本の色(素)の淡し
きも色彩色る可き物に浸し灰汁を灌きて乾す時ハ
數回を經て稍も濃色(紅粹あり コキイロ)と成なり此を以て一入再入と
云ひハ入千入とハ云なり色も亦其物の氣の穂に見
はるゝなれば其と此と同言同義なりとハ云なり然
れば酒に八鹽(新)と云も右の如く幾入も釀返せる故に

其米と麹の質を去りて其氣の穂の純粹(モハラ)なる物のみ
に成ぬ故に云ひ刀に八鹽折と云も其直鐵を幾入も
鍛ひ返して作るが故に其本質を去りて其純粹(モハラ)なる
物のみを以て作れる謂にて匕首(ヒモカタナ)にて八有れども此
上無き利刀なる事を知らせたる称なるなり折ハ折
返なる事右の私記の説の如し又傳二十二卷四十八
丁に云るが如く血と
血液(ケツエキ)との差別有る事にて血と云ハ人体に在る水液
の抱称なり其を釀し色ミたるをハ血液と云て尋常
の水液に分てるも此と同例なり凡て鹽と云ハ右に
云る如く氣の精妙なる物を云称なるが其始ハ水土
と風火の相和して地中に鹽氣を生ず消石硫黄の類
是なり此鹽氣(ヒカタ)巖石に含みて靈氣を釀し成す時ハ珠玉
寶石金銀銅鐵本此に因て成る者なり又一切万物の
味ハ本淡き物なり其味を成す所以の物ハ即鹽に起

△此下あり及至得酒を熱田縁起ハ及至得酒氣と有サリ又

ゐる事右ハ云ふ説共ハ依て知ふ可し○酒ハ食ハ對へるの名なり其食ハ祝詞ハ汁ハ類ハ亦云て汁ハ酒なり類ハ食なり其食を飯と云時ハ氣生の意ハて食以て氣を生して其身体を長存なる謂なり若て酒ハ汁と云物の狀ハ有れども食物の如く其質を高ぶ物なるず酒ハ眞氣の義ハして其氣を主と爲る事ハて食ハ腹内ハ入て氣を釀して酒ハ外ハ釀して内ハて醉ふ所の物なる事已ハ傳十九六十九丁ハ粗云ふが如し偖酒の眞氣なりと云ハ万葉十四四丁ハ不盡能祢乃伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊毋我理登豆佐波奈氣ハ意不醉受吉奴と有ふ此を

以て其醉と云物ハ其質氣ハ在て質ハ非ふ事を曉ふ可き者なり神功皇后十三年御紀大御歌ハ虚能弥企破和餓弥企那邏儒區之能伽弥等虚豫耳伊麻輸伊波多ゝ須周久那弥伽未能云ゝと有ふ區之能加弥を鈴屋大人の酒之神と云れ又古事記明宮段大御歌ハ許登那具志恵具志ハと詠せさせ給へふを言和酒咲酒ハと説ゐたふが如く酒を區之と云ハ氣汁の義なり又右ハ弥企と有ハ御酒なり又中臣壽詞ハ謂ゆふ黒木白木ハ大御酒を儀式ハ黒酒白酒と有ふ如此く酒を企と云ふ云も其言義ハ氣なふを以なり和名抄

酒醴類ハ酒食療經云酒和名佐久五穀之華味之至也と有
も五穀の精華味の至極なりと云事なりけれハ彼か
ても酒を氣と爲るなりけ〳〵通證ハ篤信曰酒之爲
桉是陶淵明称忘憂物蘇東坡名掃愁帚之意と云れど
も其ハ西戎なる畸人の戯言ハこゝ有けれ何ぞ此を
以て神代の事ハ及ハさる可き○釀ハ迦美と訓べし神功皇后十三
年御紀ニ武内宿祢爲大子答歌之曰許能此弥企御酒。釀鳩迦弥雞
武比人等破曽能其菟豆弥。于歌輸珥多氐立。于歌比菟菟迦弥作。釀
雞梅迦墓。許此能弥企御酒。能阿椰珥于歌多娜樂濃芝作沙。と有る
此御歌古事記ハも出たるゲ前文ハ其ハ御祖息長帯日
賣命釀待酒以獻云〻と有り其明宮段ハも又於吉野

△四ニテ小爲君釀之待酒安野ハ獨哉將飲友無ニ四ヲ

之白檮上作横臼而於其横臼釀大御酒獻其大御酒之
時撃口鼓爲伎而歌曰加志能布迩余久須袁都久理余横
久須迩。釀迦美斯意美宮美岐。下略と有り又一カ葉ニ十六十三ハ
味飯乎水ハ釀成吾待之代者曾無直ハ之一ハと有も酒
を釀成す事ハ偖此迦牟須迦ハ又迦毋須とも活く事なり
ハ言義ハ氣産ハ傳四七十九丁ハ謂ゆる高皇産靈尊神
皇産靈尊の産ハ同じりる可〻飯と水との氣相釀〻
て成れる酒なれハ必然有べゝむところ所思えたれ
又出雲國ハて國造の新嘗祭ハ行向ふ社を神魂社と
書て迦毋斯能社と云ハ酒を釀成す社の謂なる可け

わゞも然りゆて神魂の字ハ然り訓の有り事又故
有て聞ゆめり又和名抄麴糵類ハ麴抒也釀之使生衣
抒敗也和名加無大知と有も釀立ハ義あり又俗ハ此
を音便ハ迦字自と云りハ釀實の義あり又糵説文云
糵牙米也和名與祢乃毛夜之と云り毛夜ハ米之の毛也産
息ハて其同類の言ハあむ有けり 清原宣賢卿説ハ釀此云加牟古者咬咀
作酒也と云れたりハ就て通證ハも今按口嚼酒見大
隅風土記嚼之而腐熟也と云り天下の廣き中ハハ邂
逅ハ然り事も有べきなれども若右の如くあるむ
ハ貴人の料ハ誰ハ釀しめて奉るむ四神出生章第十
一一書ハ是時月夜見尊忽然作色曰機矣鄙矣寧可以
口吐之物敢養我乎迺按劍擊殺と有を如何訓れたり
説あるゆゆむ予ハ甚心得難くと所見ゆれ ○此ハ醞酒を釀れる事ハ古事
記ハ出其足名推手名推神汝等釀ハ鹽折之酒と有り
此も然り趣あるゝが此二神ハ已ハ大山津見神之子也
と已ハ名乗られたる事所見たり又天孫降臨章第三
一書ハ神吾田鹿葦津姫以卜定田號曰狹名田以其田
稲釀天甜酒嘗之又用淳名田稲爲飮嘗之と有ハ即木
花之開耶姫命の御事ハ御在しまして共ハ大山祇神の
御子ハ〳〵て酒を釀しませ給へり又常陸風土記ハ昔祖
神尊巡行諸神之處到駿河國福慈岳云〻此時福慈神
答曰新粟初嘗家内諱忌云〻更登筑波岳而請宿止此
時筑波神答曰今夜雖新粟嘗不敢奉尊旨爰設飲食敬

邦祇承云こと所見なり此両岳の神共か大山祇命神か
御在〻坐るが各其山か依て分身を以て插せ給へり
と見えたり偖此新嘗とハ當年の新穀を酒か釀か飯
か炊きて嘗初る謂なるが此ハてハ其御父大山祇神
の爲させ給へる御政なり斯るふ神名式か山城國葛
野郡梅宮坐神四座亜名神月と有る祭神の中か大酒
次新嘗
解神と申すハ大山祇神か御在〻坐〻酒解子神と申
すハ木花之開耶姫命か渡らせ給へる古傳なり若て
其酒解と申すハ味飯を水か解て酒か釀成〻給ふ由
の御名と聞えたり其ハ傳二十二三百五十六丁か註るが如

く神名式か相摸國大住郡比〻多神社有を神体ハ古
き瓶なる由云るか風土記か比〻多神社天萬豊日天
皇乙丑十月所祭大酒解小酒解神也神官八三十束と有
り又駿河風土記か伊穂原郡酒瓶神社大酒解命小酒
解神也彦押別天皇十三年癸未六月癸未初奉官幣國
中之四宮也と有を同郡闘田神社所祭大山祇尊木花
開耶姫也と有か合せて右の小酒解命神ハ酒解子神
か御在〻坐て即木花之開耶姫命の御事か渡らせ給
へるを思ふ可きなり斯れバ此大山祇神より始めて
此脚摩乳手摩乳神か至る迄何れも酒を釀成す事か

△家も饒ふ在むと寿命をも長く全む又酒作の事を守りてむ

△石の御像かて

も御功坐す神ふあむ渡らせ給へりゆる此ふ就て思出ゆらくハ
筑前國志摩郡舩越浦ふ櫻谷と云有り其所ふ若宮大
明神と申す御社ふあむ御在し坐ゆるが玄し寛永年
十一月の事ふありけるし其地ふ中西市兵衛と云者の妻
妻ふ見つらく白髪の老嫗も美麗しき女神と二神入
來らせ御在し坐て宣へらくハ我ハ木花之開耶姫命
苔虫姫命ふあり明旦海より浮び來らむ待迎へ奉れと
仰給へらと正しく思えたる間ふ其翌日其浦の人ゝ
と共ふ沖方を見渡すふ何物ふ有けむ光を放ちて
浪穂より徐くと浮來る任ふ人ゝ海中ふ入て抱上奉
らむと爲ふ上らせ給ハず其中西氏の妻手を出して
けれバ西手ふ抱れさせ御在し坐て上らせ給ひゆれ
バ其ハ中西氏の床上ふ置て齋奉りつるふ人家ハ穢も
有る者ふあり疾く櫻谷ふ移し奉る可し由又夢ふ告さ
せ御在し坐しゆバ即小祠を定めて祀ひ奉れりども
其家も豐饒ふ在せむと仰給へるハ古事記ふ大山
津見神の御言ふ如木花之榮榮坐と有ふ當り寿命の
事ハ天孫降臨章第二一書ふ生兒永寿有磐石之常存
と磐長姫命の申給へる是ふあり又酒の事ハ右の第二

△天淵記ふ置ハ槽地ゆ天淵之神隱と有れハ謂ゆる厳川上の西岸ふ設き世給へるありけり故其假度ハ

一書ふ謂ゆる天甜酒の御事御在し坐せバ其御由縁
を以て其守神も御在し坐すゆて此御守ふ就てハ殊
ふ御守厚く御在し坐す御事とあむ云る右の苔虫姫
命と申す御名奇玲らし御鎮座傳記ふ苔虫神一座櫻
大刀子神與給ふ坐靈石座也と有を師說ふ苔虫神と
申すハ古歌ふ君が代ハ千代ふ八千代ふ小石の巖と
成て苔の生すて」と有る意ふて即磐長姫命の亦名ふ
る由云れたるハ然る言ふを本國ふても其苔虫姫
命と申すハ何れの神とも知すて有しを玉襷の書の
枝木と成て彼國ふ至れるを見て漸ふ知る事と成れ
りとゞ其神の苔虫姫命と御名乘坐て見顯ハれさせ
御在し坐てより凡百十年許を經て此項其傳記の
明らふふ成れるを以て後世猶斯る類の事ふも年を
經て合ふ世ふ顯ゆる可しゆけれバ此皇大御典ハ計り
世ふ尊く奇しく妙ふ○假廢此云佐受枳ハ熟田縁起
る物ハ又も非りけり○假廢ふ作れり古事記ふハ結ハ佐受岐毎其佐受岐
ハ假度ふ作れり古事記ふハ結ハ佐受岐毎其佐受岐
と有りふ神功皇后御紀ふも二王各居假廢赤猪忽出之

登假庶咋齋坂王而殺焉と見え源氏葵巻の所々の御佐自伎心々ふ爲盡し〜たる」と云事も有り釋ふ兼方案之似屋也今世掖敷歟と云ひ纂疏ふ假庶者假作之閣也と有が如く假ふ作儲たる席の称あり儲禮の古點ふ庶を佐志於久と訓ん閣を佐受枳と訓るを和名抄居宅類ふ棚閣和名多奈と所見たれば佐受枳ハ指席の義あり可〜若て指ハ今俗ふ毋屋の廂を佐指志陀志と云ひ又廂無くして檐計の外ふ張出たるを佐志加祁と云り此ハ雅言ふ傳〜ず〜て俗語ふ遺れる者あり志伎ハ敷ふて座を占る所を云あり俗ふ座敷

（口訣ふハ假屋也と註し又）

（此ハ閣の假庶を結ひ其上ふ酒樽を置き其所ふハ奴奚蛇の八頭を載て酒を呑べき料ふ物爲させ給へるあり）

（武烈天皇御紀歌ふ欲弥能古能耶陛耶加可羅賀枳ハ琦屋世登耶弥古と有り賀羅賀枳ハ柯垣より又欲度枳ふ能耶陛能姫ふ可枳賀ニ梅賜謨傳難鳴阿摩之弭伊賀農俱弥柯枳と有ハ組垣の事あり又大子御歌ふ於弥能姫能耶賜能之摩賀枳姫能騰余ふ耶爲我與豆屋）

（此ふハ柯垣紫垣の称有り階此ふハ紫垣ふ有ハ此ふ柯垣を作て次ふ有り又之屋ふ然ハ組垣利奈賀の古傳上ハ垣ふ）

ゐと云ふ敷是あり通證ふ說文庋本作庶集韻庋閣藏食物と云り尾張人秦鼎が緣起の注ふ假庋假構屋内床之名也庋閣板爲之所以藏食物也と云るハ字ふ泥こたる說あり此ハ今世の掖敷の如く爲れるあて屋内の床を云とハ異あり○八間ハ通證ふ作假庶於八間也舊讀恐非と云るハ然る事ふて長く一聯ふる假庶（即新宮本ふハ然訓ふ）を中ふ各畏を置て八間ふ分〜れたるあり備古事記ふハ且作迴垣於其垣作八門毎門結八佐受岐と有り（呂訣ふハ假庶者假屋八間八處也と有る是あり）

記傳九　十丁　ふ云れたる說ふ予が意を加へて次ゥ云べし〜垣と云ハ槍櫑（やうとの如く）を結迴〜し給へるあこめり垣ハ字書ふ牆也徐曰垣有院周繞之意早曰垣高曰墉と所見たるを和名抄墻壁類ふ垣墻尓雅云墻（此）謂之墉李

（ひて大蛇を内ふ入給）

△意富岐美能新、呂志田良美美波美能古能夜部能斯婆加岐伊理多、受阿理の並ひ

△布久若て此八門ら八間ふ其八頭を各入て容易く抜て出べかりしぬ物爲させ給へるふまむ有けら

巡曰謂垣和名賀岐と見え又籬拵字亦作附釋名云籬字亦作櫳和名末加岐一云末世以柴作之言疎離也説文云柝和名加久布以柴壅之ちど有ら加伎是あり作迴ハ柝ひ巡らすらあり古事記甕栗宮段ふ意富岐美能美古能志婆加岐夜布士麻理志斯麻理毋登本志岐礼牟志婆加岐夜氣牟志婆加岐と有ら毋登本志是あり於其垣作八門ハ大蛇の頭を出入べきの門を八所ふ開きて其八門と八佐受岐と相對せたらあり有らあり縁起ふ一面開八戸と有も此ふ當りて譬へハ其檜曇の四方ある むふハ其三方ふをバ垣として戸を開かず大蛇の向來る方の假屋八間ふ合せ唯一面ふ並べて八門を通ハしたらあり和名抄ふ門和名加度所以通出入也と有ら是あり檜曇ハ文選ふ夜良比と訓て注ふ作木槍相累爲柵也藩屏也と有ら是あり又行馬の字をも訓むあり代醉篇ふ行馬一木横中両木互穿以爲四角施之門以爲禁約也と云ハバ少ら異ふり毎門結八佐受岐ハ其垣ふ八の門戸有て其何れふても一門ら入ハバ八の假屋有て各其一處ふして其八頭を並べ飲む可く物爲させ給へらふて其八門を合すハバ揔て八八六十四の假屋と成あり但此ふハ作假屋八間と有て其垣無く門の事無ハバ唯一假屋ふして其答間中を隔て有て八間ふ支別たらのミふて古事記の八門假屋ふして八八六十四あるとハ大ふ異あり

ケり今何れら宜しくむと考らふ此ハ素戔嗚尊の

△右の八八六十四の假殿かてかおろ狀ろれども猶熟思ふに右の毎門結八佐受岐有ハ其假殿とハ間と成し門と八戸ハ閑きて其二門ハ假殿の一間と高合せたるかろ可けれハ其八佐受岐ハ此の作假殿ハ間と云ふ異ふ〳〵ざりけり然れども凡ての委しき事共ハ

何れか在れ道し給ふまじく物爲させ給へると又其大蛇か可畏き神ありと御言を係させ御在し坐て甚く饗爲させ給ふ狀か持成させ給へるあれば其大蛇ハ素より貪りすて飽く事を知ざる可しめれば此か天乾てハ彼か移り彼か畢てハ此か來り飲て終ふ勞れ臥す可く事計しせ御在し坐けりと見(田)れば

十日事記の方あむ其理合て甚正しき傳と所思えたり

けり但地神本紀かハ亦造迴垣則於其垣作立八門造の假殿か見設つが煩さくて其二字を削りたる本の有つるを取れるかめども古事記の作八門毎門結八佐受岐と有も毎門か其八假殿の一間ごとに結附るかの意か目易く見る時ハ却あて其二字有る方幾計の

勝れり○作字此かハ由比と訓て古事記か結八佐受岐と其訓同じきハ唯假殿ある故か今結給へる事決さを甚と上古かハ天皇の御殿を始奉り凡ての人の宅舍も其如く結絡(ユヒカラフ)たり し者ありけり其ハ古事記羽山戸神の御子か久と紀若室葛根神と申す神御在し坐す其ハ久と紀ハ莖木ありし若室ハ新室ありし葛根ハ結絡むる葛の名ありし顕宗天皇御紀室壽御詞か築立稚室葛根云と取結縄葛者此家長御壽之堅也と見え大殿祭詞かも引結幣(魯)葛目能緩(比)取昔計(魯)草乃噪無久と有ハ天皇の大殿造の狀かハ有れども猶葛目を以て

結バしめ給へり又大嘗祭式悠紀主基二院を今造ら
るゝ所ハ所造正殿一宇構以黒木菅以青草以檜竿爲
天井席爲承蓆壁蔀以草表裏以席地敷束草所謂何上都加
加竹簀其室簀上加席と有て萬ハ葛を以て結縛ゆて
御屋とハ成せるもあり是上世の家作の狀ハ有ればハ
況て假廬などの如き假初なる所ハ葛以て結作ら
可き事云も更なり又其諸門の事を編楉爲扉と
八座置四座置などの如き物をも皆葛以て ○各置一
結ハるゝ上代の狀をも此ハ思合す可し
口槽ハ緣起ハ各置槽と有て一口の字無し其各字
ハ古事記ハ海佐受岐と有ハ當ハ其一口ハ上ハ謂

△各地登都能酒船袁置ゑと訓り箕系蹠ハ設ハ口酒槽射爲人ゑ飲ハ頭蛇也と有ハ如此也

ゆゑ作假廬八間と有ゑ其八一間毎ハ一口の酒槽を入
ゑ故ハ第二の一書ハ釀酒八甕と云ひ地神本紀ハも
釀八醞酒八甕云と作ハ立八門造八假廬各置槽一口と
ハ文を成せるハて其一甕を一口と云なり但此ハ
甕と云ハ八槽と云事を假ハ云るなて實ハ甕ハ瓦器
なり槽ハ木器なり此を一ハ爲べゝざるなり偖大
和志ハ高市郡鳥見神社酒殿在岡村上方一大石縱一
丈五尺横五尺石面彫刻槽七道相傳者決宿神酒於此
と所見たれば上代ハ石なれも酒船を彫作れるも
ゆゆ和名抄木器類ハ酒槽文選酒德頌注云槽酒槽佐賀

布祢 如今之酒槽也と有り右の飛鳥神社ふ〻ハ神代ふ事代主神の酒を作らせ給へるなりわが神酒と續け訓べし〻〻ず神と酒とを放ち訓べし山城國松尾神社の傳ふ大山咋神日尾の楫を以て榊を作り山田の米を以て御手洗の水を浸し酒を釀り給ふと云事有る其大山咋神と申すハ即事代主神ふ渡らせ給へる由傳十五卷三百五十八丁ふ云ふを考ふ可し偖此各置一口槽と有り其八門ふ其八頭を指入れて其假廏ふ届り

(1)各其間毎ふ在る酒槽ふ頭を一頭宛向〻〻めて其八頭共ふ各休〻ふ事無く一時ふ口を入れて呑醉め可く神量ふ謀らせ給へる物ふして其頭を抜出むと爲ふふ其門ふ抑止められて容易く出会る事を得ざらしめて此ふて必切伏むと思ふ定めさせ給へ

○口訣ふ使ふ尤公釀ふ八度酒搆ふ八處議ふ大蛇以今報所ふ八箇之文也と云〻

る神策ふあむ渡らせ給へりける天淵記ふ示素戔嗚尊計奇計置八槽醞舟又作艾偶女置東山頂其影沈八槽大蛇見之以爲眞女便矯八頭飲八槽中無女無端呑ふる艾女熱悶と有が如く彼ハ本より彼童女を志して來ふる者ふ〻有けれバ其槽中ふ移れる影を見て信ふ其と心得て呑たふけむハ然る事ふ〻〻但艾女を仰見る迄ふハ至る可らず此ふ呑伏寢たりと見る中穩ふハ有べ〻〻む(2)合軍遠説ふ結搆八架置一槽使八岐首各不可轉動是乃尊之兵法也と云ひ玉木某も八頭異處以分其勢此以募歆衆之略也酒則蛇之所嗜

故設之此誘其欲以折鋭氣之術也と云るハ何れも云
得て愛しき說共ハある者あり然れハ我が上古ハ兵機
を始めて起させ御在し
坐けるハ此大神ハあるむ渡しせ給へりけるる彼西戎ハ
謂ゆる握機八陣の如きハ皆此大神ハ始れる神軍の
法の全く彼ハ傳ハれる可し
者と云て可るる可し○盛酒の盛字ハ毋理氐とも
伊礼氐とも二の訓有り私記ハも盛酒入酒也と有れ
ども猶初の方や然る可るるむ古事記ハも此を盛其
八鹽折酒と有り凡て器ハ物を容るる事を毋流と云
ハ大同本記水取文ハ天忍石乃長井乃水乎取ハ盛天
誨給支此水持下天皇太神乃御饌ホハ盛又皇御孫命
乃御饌ホハ盛獻天と有ハ盛を毋理と訓む外無き所

あるるり武烈天皇御紀影媛ガ歌ハ拕瑩筒該伊播伊飯比
佐倍毋理盛拕瑩玉暮比伊瑩水逗佐倍毋理盛と有ハ更あり酒
宴の事を佐迦毋理と云ふども酒を盞ハ盛て飲むよ
り云語なるるど思合す可し又盛ハ餘も同し言ある
ハ器より餘る計ハ成るを云ある此を伊流と云時ハ
多ハ抱りるぬを毋流と云時ハ大ハ語ハ力有り
○待之也ハ麻知多麻比伎と訓べし新宮本又縁起共
ハ此ハ也字無し第二書ハ二神隨教設酒と見えた又
ハ古事記ハも告其ハ足名推手名推神汝
等云こ而待故隨告而如此設備待之時と有て其ハ二神
を負せて設備て待め給へるが故ハ上ある待字ハ記傳
ハ麻知氐余と訓れるるが如く二神ハ負せて今待給

へるあり次ふ待之時と有も其誂給へる如くして二
神の待居りて大神ハ傍ふ御在し坐す義あれバ麻都
時ふと訓むあり然るを此ふも上ふ乃使脚摩乳手摩
乳釀ハ醞酒弁作假殿ハ間と有云迄ハ其二神を使令
ワひ給へる文あるを此次ふ至りて各置一口槽而盛酒
と云ハ此大神の御所作あれバ此の待之也ハ其も亦
大神の待せさせ給へる意あるあり右の如く事ハ共
ふ同じき物なり此待字ふ至りて自他の差有る者ふ
り故其古事記の隨告ハ隨勅と云むが如く如此設備
待之ハ古事拾遺石窟段ふ仍今某神作某ことと有て其

物既備云ゝ儲備既畢具如所謀ふ云ゝと有が如く先
ふ其使令を云ひ中ふ其仰事を奉りて事物の出來る
事を云ひ終ふハ事物已ふ具足ひて其謀る所を行ふ
謂あると全く文義の段落有て紛るゝ所無き者あり
但此と古事記と一ふゝざる事ハ上ハ十九丁ふ云る
が如く彼記ふハ其ハ岐大蛇の事を先ふ語申せるを
此ハ先ふ其狀を云ずて至期果有〇至期ハ登伎ふと
丈蛇云ゝと云るあれバ一ふゝず
訓るも新宮本ふハ登伎伊多理氏又許登能碁登久と
云ふ二訓有て共ふ面白き事あり其登伎伊多理氏ハ
ハ上ふ吾兒有ハ箇女女毎年爲ハ岐大蛇所吞今此ふ
童且臨被吞と有ハ毎年ふ大凡大蛇の出來る可き時

△例ハ武烈天皇紀皇太子御歌ハ須衛婆陀志豆謀ヽ有を釋ハ未果也ト註せり是ハ此

日の有を已ハ其時ハ近者を右の如く申せるなり
が其時節ハ至りてと云事なり古事記ハ今其可來時
故泣と有る是なり又今一伊許登能碁登又と云るハ
如言と云事ハて右ハ大蛇の始末を語申せるハ合せ
て果して然有けりと思合せさせ給へる所是なり然
れども此ハ登伎ハ伊多理氏と訓むハ正しく叶ふ可
らむ万葉三卷五十一丁ハ應還時者成來又時ハ波
不有跡雲隱座六卷四十五丁ハ時之往者京師
跡成宿十卷二十六丁ハ金風靡見者時來之又三十五
丁ハ時有者今盛有又四十六丁ハ黄葉爲時ハ成良之
十五卷二十七丁ハ和藝毛故我麻多年等伊比之等伎
曾伎ハ家流ものと云る即此なる訓と例とも云へき事
共ハ○果を波多志氏と云ハ己ハ其の言ふ所信有て終ハ

△但縁起ハ有大蛇到と有る其文ハ凡て蛇なり取れる者と所思しければ其書の成し寛平の當昔ハ然る善本の有しなりけり百三十丁云至照し見る可し

其事の見へるを云なり故此ハ古事記ハ其八俣遠
呂智信如言來と有ハ換て至期果有大蛇とハ有なり
けり天孫降臨章第一一書ハ果如先期皇孫則到筑紫
日向高千穂捴觸之峯と有る果字を古本ハ官ハ都比ハと
訓りを新宮本ハ波多志氏と訓ミ海宮遊行章ハ唯赤
女比有口疾而不來因召之探其口者果得天鉤其第二
一書ハ是後豐玉姫果如其言來至と見え古語拾遺御
天孫降殷ハ天鈿女命還報天孫降臨果皆如期とも有
り言美我ハ物の最末を端と云ひ竟と云る是なる可し
名義抄ハ俗作菓許能美俗云久陀物波多須宛也濟
也信勝也能也登具○大蛇ハ說上十丁ハ云り○頭尾

各有八岐ハ古事記ハ身一有八頭八尾と有る是ハて
頭有八岐尾有八岐と云むが如し偖其八岐の説ハ上
五十五丁ハ注るが如く弥俣岐の義ハとも聞ゆれども其記
ハ作八門と云ひ結八佐受岐と有るハ字ハ夜都と訓
む可き所あるが上ハ此ハも蔓延於八丘八谷之間と
云るなどハ正しく數の八と聞ゆれば實ハ身一ハ
て八頭有ハ八尾有ける事灼然き者ありし偖其身
一と云るハ第三の一書ハ乃以蛇韓鋤之劔斬頭斬腹其
尾之時劔刃欠缺と有ハ合せて思ふハ其腹を指て云
ふなりけハ大蛇ハ八頭八尾有と云事ハ人皆訝ける事

ハ有れども神代ハ除て人世ハすべて一躰ハして而
頭有ハ四手四足有る異狀ある者有けり仁德天皇六
十年御紀ハ飛彈國有一人曰宿難其爲人壹體有兩面
面各相背項合無項各有手足其有膂而無腿踵力多以
輕捷左右佩劔四手並用弓矢是以不隨皇命掠略人民
爲樂と有ハ如き人も有けり況て蛇ハ常ハ兩頭
の者有て奇しきを此ハ謂ゆる夷服岳神の
變化ける大蛇ハして尋常の者ありけれハ其形
も亦異狀ありつるむを何ハ以て疑を容る可けんや
然るを四訣ハ頭尾各有八岐者增長一形狀如素戔嗚
尊爲八惡行と云ハ此人ハも似合しきを安言

を吐出たる者あり豈此大蛇の八頭八尾を以て此大神の以前に犯し給へり御悪行に配ふる事を得むや余ありけるに附會と云べし備此岐字は名義抄に知麻多又伊波夜又佐加流又須智加倍又美知又須美夜加と有る其初の知麻多と取れる者あり釋名に物而爲岐と見ゆ又通證に引る宋玉招魂に雄虺九首往來倏忽吞人と有を猶呉都賦に雄虺之九頭と有る注に毒頭九頭と有れば西戎にても毒蛇の九首あるが有り

ありけり○眼如赤酸醬 赤酸醬此云阿箇 鵝知 を古事記に彼目如赤加賀知而と有に依て此の眼字は目と訓べし然るに御紀に八通はし被用れたれども已に傳十四百五十九丁に註るが如く和名抄に釋名云目默也默而内識也と有て其摠称あり次に眼眼皮 附 廣雅云眼 和名萬 奈古 目子也 一云瞳訓同上 遊仙窟云眼皮師説萬比岐一 説萬奈古井 と有て眼は

目に中心と云義にて其睟を云 中心 ばば目の全形の称にはあらず又其眼皮と云は其表皮をいふにて萬比岐は目引にて其色を包む謂なり又萬奈古井と云は眼 眼上 居にて其眼を其處に置居る 居る狀を云 称呼なり此を以て目公其摠体を云ひ眼は 其眼皮を以て覆へる其 其中心に在て物を見る所の称にあらを知べし 字鏡に暗晴也 万太乎古又 睟目精 万太乎古と有る此を以て曉る可し 故四神出生章第六の一書に洗左眼又洗右眼と云ふ眼字は目を洗給ふて目の中心を云ふ非るが故に萬那古とは訓ず古事記に洗左御目又洗右御目と有る等しく美米と訓れ又其第十一の一書に眼中生生耳と有も同記大宣津比賣神段に於て目生稲種と

▲源氏柏木に行に公ケ〻麻奈古井閑は耻かしき狀の様離れて薫り奇笑しき臭はしき物なり檜笛には麻奈古井とあり此は今文に強て廣有る狀腦かたれど あじも有て此は

腦 水

△其外郭なる眼皮 ふて包めるなり

有も共ハ其目より出來成れるかて其中心をこゝろハ非
るが故ハ此眼字をも唯ハ米とのミ訓たり但大同類
聚方第二章ハ波奈ニ喇。皇成久。知那剌萬那古奈俚美味阿
奈ニ剌。成と有れバ此萬那古ハ目の揔称の如くなれど
も其中心をこゝろかて眼皮ハ皮ハ屬き肉ハ屬く物ハ
れバ此ハてもハ打任せたる名の謂ハハ非る者あり然
れバ此ハ如清酸醬とこゝろも其實の狀ハ甚能似たり
ける故ハ譬を取れる者あれバ此眼字を字の任ハ萬
那古とハ訓べるず古事記の如くハ目と訓つ可き
所あるを知べし又同抄ハ瞻文字集略云瞻和名久呂萬奈古

瞳子黒也と有ハ黒眼と云事かて瞳子の黒點を指て
萬奈古とハ云あり又眸廣雅云眸和名比止美一目珠云訓與眼同
子也と有る比止美ハ人見比云事かて物を見る所の
称あり此ハ別ハ訓與眼同と有ハ名義抄も萬奈古
又比止美の両訓見えたる是あり斯れバ萬那古と云称
ハ瞳と眸との所在ハ在て目の揔体ハ非る事此を以
て知られ可き者あり故此目の言を本かて目某
と云言の多在るハ皆此ハ从ふ事ある故ハ同抄ハ瞼
和名萬奈不太目瞼也と有ハ目之蓋の義あり眶和名萬奈目加布良
眶也と有ハ目之覆の義あり眦和名萬奈之利目列衣也遊仙窟

△古事記ニも此謂
ふ赤加賀知者今酸
醤者也と所見たり

△仁德天皇五十五年
御紀ニ因以掘田道
墓發瞋目自墓
出以赤蝦夷と有
て大蛇の目と發
瞋〻せる狀の可畏
き事なとこ云ひ

云眼尾師説訓と有ハ目之後ノ餘ハ此ニ准ふへて
同上
知る可し　又名義抄ニ眼匡麻都保と有ハ目區ブ多
目汁凝也と有る是なり瞬を麻多ゝ久と有ハ目叩ふ
ニ文選注ニ閉目之間也と有を以て僅ニ叩く程の間
を閉る義なるを思ふ可し此等を以ても目と云ハ其
揔称なりて此を眼目なと熟字ニ云ハ身と心とを並
云ニ異なるさる云様ニなむ　○赤酸醤此云阿箇箇鵝知　△天孫降臨
章第一ノ一書ニ猿田彦神の御形狀を書されたるハ眼
如八咫鏡而赫然似赤酸醤也と有も同し物ニ辭言へた
る者なり　△雄略天皇七年御紀ニ乃登三諸岳捉取大蛇
奉示天皇天皇不齋戒其雷虺ヒカリヒロキテマナコカヾヤク目精赫ニ天皇畏蘇目
不見却入殿中使放於岳と有も同しく其目精の光赫

きて可畏き狀を云るなれとも其形を注さゝるを
此ニ眼如赤酸醤と有ハ其形狀をのミ云るなり若て
此物の質ハ〻も西戎ニ云る如くして圓るなる珠の狀なる物なる
を取て譬へたるハ彼海鰕なとの目の如く外ニ飛出
て其頭毎ニ二の赤酸醤を附たる狀なりけむ〻然
書し傳らはたりける事甚著明き者なりけり俗ニ蛇目と
云て紋なとニ畫る狀ハ唯丸くして中子の白く有る
のミなり其ハ唯尋常の狀なりけるを此大蛇の眼の
狀ハ其赤酸醤を二並べて著たるが八頭ニて十六計
ニて虺ミたるなるなむ甚恐るしけなる狀云む方無き事
なりけ　偖此赤醤を私記ニ其色如赤血也其目耀赫猶

〈けり古事記ハ見其腹者悉常血爛〉と云ひ縁起ハも其腹皆爛壊と有ハ如〻血走りたる眼の狀思ふべし

〈八本清陽ある物の称ハ阿斯訶備〉と云言の有と取て草名さし又其を復して其清陽ある物ハ

如赤血也欲言赤血便假云赤酸將醬也是今保〻都岐者也其色亦艶然故爲之其本意是赤血也と有る此說ハ依る時ハ赤酸醬ハ赤赤血と云事の約わるもあり和名抄蟲豸類ハ蟒蛇兼名苑云蟒和名夜萬加〻智蛇之最大也と見えたるを以思ふハ其蟒蛇の目の狀ハ草實の彷彿たる故ハ号けたるを本ハ復〻て其眼の狀を譬へ申せる者ある事此神世七代章ハ謂ゆる葺牙ぢの譬の如き者あり但保〻都岐と云ども其艶然たる色の名と爲る事あれども然〻ず其ハ本草和名ハ酸醬一名酢漿一名酢菜出雜要訣一名苦蔕子出ハ品方一名洛神珠一名王母苦蔵珠蔵音針一名寒漿已上出兼名苑一名苦蔵一名苦蘵子一名王母珠一名皮辨草已上出古今注一名酸芳草出刪繁語和名保〻都岐一名奴加都岐と所見たる此保〻都岐ハ通證ハも火〻著也と云ども次ある奴加都岐ハ如何とも訓べからざるあり故思ふハ保〻都岐ハ頰著あり奴加都岐ハ額著ある可くして小兒の常ハ手弄ハして其中の醬水を拔出て太ハ皮計ハ〻て頰ハ貼ハ額ハ押ちぶして遊ふ事を今も見る上ハ上古ハも兒戲ハ然物爲たりつゝむを唯有ハ輕く其称と〻して呼つる者と所見たり口訣ハも赤酸醬熟保字豆枳と云ハ此草實の實ハ熟

らめるハ信ふ火球の如くなる物なれハ其如き狀
なるもふハ甚〻可畏く怖すべきつゝむ事云も更
なる事○松栢生於皆上ハ第三ノ一書ふ彼大蛇毎頭各
有石松兩脇有山甚可畏矣と有如くを口訣の此の
注ふ松栢生背經年之謂と云るが如く年序を數多ふ
經たるけゝ大蛇ふして其身と云へハ次ふ蔓延於八
丘八谷之間〻見えたる程の物ふ有けれバ其頭八
岐なる所ふすで磐石有ふ松栢有ふ殊ふ其兩脇ふハ
山岳を載せたる程の怪物ふ有けれバ然る松栢の
如き大樹共ハ生出たるけむ事信ふ然有ふ可き事ふ
すけふ古事記ふハ亦其身生蘿及檜榲と所見たれバ

△香具山日記ふ
も松栢生背と
見ゆ

異なる傳なるが如くと雖も然らず其皆上ふ自然ふ
土沙の凝重なりて深山幽谷の如くして松栢の如き
も檜榲の如きも蒭欝なりて蘿などの類すでも生茂り
たる狀なり其蘿も一名松蘿と云れバ檜榲とハ唯其
一二を採出て云ふこと有けれ松栢も並生なる事其
蘿字ふて所見たれバ共ふ別なる所なむ無なけゝ其事
共ハ此次ふ云を見る可し又此ふハ唯松栢とのみ云
る甚事の足ハさるふ似たりと雖も其深山木の大凡
を云るふて其余を松栢ハ麻都加倍と訓り如此並べ
響りせたる者なり
用ひたる例ハ万葉十九十六ノ丁ふ眞珠乃見我保之御面
多太向將見時麻泣波松栢乃佐賀延伊麻左祢尊安我

吉美と有る是あり故此ゝ松柏の二を抽出て云ハ松ハ長生の物あり柏ハ淺深山の物あり其指上ちゝ樹共の年深〻して深高ゝ立る狀ある事を強く令聞るわたる者あり先松の事を云む古事記日代官段倭建命御歌ゝ袁都能佐岐那流。比登都麻都阿勢袁と有る比登都麻都と云ハ喬松ゝて群木ゝ抽出たる由ゝるが此ハ万葉六四十一丁登活道岡集一株松下歌二首ゝ一松幾代可歴流吹風乃聲之清者年者年深香聞又靈剋壽者不知松之枝結情者長等曾念と有が如く一松と ハ古松の謂ある者あり猶松の壽きを詠ゝ

△波之伎余之家布能安路自波伊毛熊麻都能都祢尓伊麻佐祢伊麻毛美流其等又

其ハ三四十八丁ゝ眞木葉哉茂有良武松之根也遠久ス九三十一丁ゝ妹等許今木乃嶺茂立嬬待木者古人見祁見十二丁ゝ神左備而巖ホ生松根之君心者忘不得毛十九丁ゝ都我能木能伊也継〻尓松根能絶事無久二十四十二丁ゝ夜知久佐能波奈波宇都呂布等伎波奈流麻都六十六丁ゝ能左要太乎和礼波年須婆奈ゝ有る遠久すハ其壽きを云ひ古人見祁見ハ其年舊たる由を云ひ伸左備而ハ年を經て神〻〻成りを云ひ絶事無久ハ其長く續ける由を云ひ都祢尓伊麻佐祢ハ其易變ずを云ひ等伎波奈流ハ其葉易ぬを云ある如此く松ゝ

ハ其久しく在持てる事を云る常なるを思ふ可し古今集賀歌ハも萬世と松ハぐ君を祝ひつる千年の陰ハ住むと思へハと有て斯る類珍奇〳〵しらず通證ハ篤信曰松持也持久之意と有ハ然る事なり万葉十一卷七丁ハ千早振神持在命誰爲長欲と所見たれハ多毋都の切れる言なるめり柏ハ右ハ引る万葉ハ松と並云るが如く漢籍ハも然並云事常なり和名抄木類ハ柏兼名苑云柏一名槲和名加閑と有を別本ハ和名加江と有り又名義抄ハ柏子一名榧子と所見たるハ同抄菓類ハ榧子本草云柏實一名榧子和名加倍と有れバ柏と榧とハ同木なる事を知られたり本草和名ハも松實と並べて柏實ハ子人出蘇敬注一名槲ハ音菊已上二名出兼名苑和名比乃美一名加倍乃美と有ハ右ハ同しきを又榧實一名彼子一名披杖已上二名出蘇敬注和名加倍乃美と有て柏と榧と、を分たりと雖も柏實ハも榧實ハも同じく加倍乃美と云訓有を以考るハ通證ハ加閑今按香重也と云るが如く其種類を加倍と云るなれバ同名なりて異木なる可きハ栢實の方ハ今一別比乃美と有れバ漢籍ハも松柏の柏を檜なる由ハ云るハ等しく檜實ハも可けれハ此ハ必檜ハこそ有つるめ若て榧の方ハ本草ハ時珍云生深山中人呼爲野杉其實爲披子又曰

玉山菓と有れバ名義抄和名抄ちゞか柏子と榧子と
を一ふ爲るハ其實の香細〳〵さゝ〳〵共ふ加倍
と云ふ依て混れたる者とゞ所思えたる然れども其
木を云時ハ本より別ありと知べし然ればバ古事記ふ
る蘿ハ此の松ふ當り檜ハ本より柏ふ當れる事云も
更なる事なれ〳〵又此を加夜と云ひ加江と云ハ其
の食用とも成る物なれバ香餌の義なる可し然れバ
榧字の方ふ限れる訓ふて此ハ人
其實ふ唯香のみを賞ると食用ふ充るとの異有る事
と見えたり江次第御佛名條ふ今夜差柏梨左近衛府
攝津國在名也と有て重表書ふ柏梨昔府中將和氣某以
攝津國柏梨莊寄左近府と見えたる此地ふ出來る酒
を彼用る故ふ歌詞ふ加倍那志の酒と詠るも柏ハ加
倍ふ但此柏柏同字なるを以て榧字ふ借用ひられ
たる古書の例なれども此松柏の柏ふハ非ず思混ふ

る事
勿れ故其柏ハ正〳〵檜ふ當れるを其古事記ふ謂ゆ
る蘿ハ和名抄苔類ふ蘿日本紀私記云蘿比加介女蘿也又松蘿一
名女蘿和名萬豆乃古介と有を漢名義抄ふ蘿字を比
一云佐流子加世
加介又古介と訓れたり凡て古介と云ハ何ふ在れ其凡ての苔類
の称ふ〳〵有れバ深山幽谷ふ多く生て松ふハ限らず
る事なれども殊ふ松ふハ多く生る物なるゞ故ふ己
ふ松蘿の名有り己ふ一万葉二十四ふ從吉野折取蘿生
松柯遺時額田姫王奉入歌一首と詞書ふ在て三吉野
乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言字持而加欲波久
と有り歌ふ其蘿の事を入給ハざるハ松枝ふ屬なら

物ありが爲あり此を以て古事記に（亦其身）生蘿及檜榲と有
を此に松柏生於背上と有と相等しく傳ありき合せ
云ハ右の蘿及檜ハ此の松柏に正しく當れるを以ふ（事右の如き）
り次に榲ハ此ふ云ざれども其主と有る松柏を約め
たる者あれバ義に於て違ふ可くずあむ有ける若
て其檜榲ハ傳二十二 二百九十五丁 上六丁 に已に引る此第五
一書に素戔嗚尊曰韓郷之島是有金銀若使吾兒所御
之國不有浮寶者未是佳也乃拔鬚髯散之即成杉又拔
散胸毛是成檜中略夫須散八十木種皆能播生と所見た
る此時に成出たる（物共）ありて然ればこの大神の出雲國に天

降り御在しに坐て此大蛇を退治ることを給へるハ天上よ
り再降來坐る時の御事にして彼末共を生しにさせ
御在しに坐けるハ先度ありて其年序ハ幾千万年を
る隔在りけむ其大蛇の背上にありて然る松柏の如き
大樹の生茂りけむハ天下悉く青垣山と成ぬる上の
事なる可きを思ひて其御天降の前後をも此に思ふ
可き者なるむ有ける然るを地神本紀なども右の
第五一書の故事を須賀宮に宮處定坐しぬるハ次に（其大蛇を事高給へる後）
收めたるぐ精しくざる事ありける末世に播生し（其大神の）
給ひぐる以前に如何にして檜榲ハ生たりしにる前

後共ふ打合ざる事ある事を其心至らざりけるとる哀
わるかりける所作なりけれ又古史成文ふも其八大神の
けるる御事を天上より神逐つりて天降り御在し坐て
即有し者の如く記さわて右の第五ノ一書の事共をバ
再天降坐し時の事實として鰒川上段の先ハ入るれ
なるハ深くも考ざわし者かて麁き事ある能こ此卷
首ハ云る事共を合見る可し○皆月上ハ曾見良ふと訓べし此字瑞珠
盟約章第一ノ一書ハ出たるハ說ハ傳十二百二十ハ云ハ
き○蔓延於八丘八谷之間ハ古事記ハ其長度谿八
谷峽八尾而と有て其大蛇の這度る長さを俗より見
渡して其鳥上山の丘谷を以て量わるるハ此八も例
の弥ハ非る證ハ天孫降臨章第一ノ一書ハ時味耜高彦根

○百二十七

○又其正書ハ頓丘此云毘陀鳥と注して丘を鳥と割る證見ゆ
○又付五安之比奇乃八丘飛起
○已ハ四神出生章第六ノ一書ハ畝丘と有を古事記ハ畝尾ハ作れり

神光儀花艶映于二丘二谷之間と有も其處の丘谷を
以て量わるハ同一事なり偖其八丘ハ數の八ちるを
弥の意ハて云ハ万葉十九十丁ハ足引之八峯之鶏又十一
丁奥山之八峯乃海石榴又十四安之比奇能八峯布美
越又十八丁八峯尓波霞多奈婢伎又四十二丁安之比奇能八
峯能宇倍能二十五十五丁ハ安之比奇能夜都乎乃都婆吉
など有る此ハ物ハ際男を立て云ハ非わバ此の八丘
八谷の例ハハ非ず偖丘を袁と云例ハ天孫降臨章ハ
頓丘此云毘陀鳥と見え雄略天皇五年御紀ハ倭我尼
導能袁利志阿理鳴能宇倍能云こ皇極天皇三年御紀

△猶三十三行後段土記ハ尾上ノ峯頭ハ高照ヽ座せる文ハ就て注すを見る可し

歌ハ武向ノ飼都鳥ヲ陀立底屢制羅我兄。ふど有り丘ヲハ尾と云ハ等ヽく山上より麓上カヘ打延へて長くく(續ふたるハ尖ノ)て物の尾の如く有を以云称ふり和名抄山谷類ハ丘周礼註云丘也と有を說文ハ山(昔土高曰丘和名字加と見え圓也)と云ひ又岳を廣雅ハ山高丘也と有を釋名ハ土山曰阜と有り此も皇極天皇三年御紀ハ袁加と訓り又釋名ハ大阜曰陵小阜曰丘と有ふど此等ハ何れも袁加と訓む所ふるが其ハ丘ヲ(高の意ふる可し)(處)猶其事ハ八谷の谷ハ神武天皇御紀ふ國見丘の下ハ云てむ八谷の谷ハ景行天皇十二年御紀ハ皆投洞谷(タニ)と有る洞谷を訓ミ雄略天皇四年御紀ハ天皇射猟於葛城山忽見長人來望丹谷(タニカヒ)と有ハ谷峽の義ふて世ハ谷間(タニマ)と云ふ是ふり万葉六(二十丁五丁)ハ谷蟆乃狹渡極十一(四十丁)ハ山高谷邊蔓在玉葛十二(二十五丁)ハ谷迫峰邊延有玉葛十四(二十六丁)ハ多ハ尓世婆美弥年尓波比多流多麻可豆良十七(四十一丁)ハ弥祢多ハ可美多尓子布可美等十九(十八丁)ハ谿邊(云ハ之可礼抑毛谷可多頭伎ハ)敬尓波海石榴花咲又(二十五丁)和我勢故我垣都谿尓又(二十六丁)多尓知可久伊敝波乎礼騰毛許太加久氐佐乃波安礼騰毋ふど有り多迹ハ垂(タリ)往ふて水の流れハ就て云称ふり其ハ大忌祭詞ハ山山乃自口狹久那多利尓下賜水乎甘水登受而又大祓詞ハ高山末短山之末與理佐久那太理尓落多支都速川能瀬坐須と有を鈴屋大人の後釋ハ狹ハ例の眞ふて眞下(マクダリ)蚕ふり川水の山より落る狀

を云り偖然水の落る所を久良とも多尓とも云ふ久良ハ久那多尓ハ多理なて共ふ久那太理より出たる名なり（下ヒカ）略ふ云はたるふなて著りり其ふ就て神名式ふ近江國栗太郡佐久奈度神社御在（今櫻谷神社と申せり）坐す此を以て其（亦云多）多理を登と云事知しる山之門（ヤマノト）是なり万葉ハ二十三丁ふ霍公鳥今毛鳴奴山之常影尓十四丁ふ足日木乃山之跡陰尓鳴鹿之など有る常影又ハ跡陰なとハ借字ふて門陰の義なり又中古の歌ふ谷の戸出る鶯など詠るも同じ〳〵して其谷なる所〳〵も山ふ出の形容ふ取て門とも云べき所なりけれバ云なり傳十百十六丁ふ

（又其ハ谷なる所を富登と云なり合門の義なり又古事記浮宮殿ふ御陵在畝火山之御富登也と有と懿德天皇御紀ふ畝火山南御陰井上陵と作れたり此富登も亦右ふ同ト又）

門ト

（又ハ昨日見帝令社間吾妹兒之幾許継手見巻欲毛）

（又ハ千大海之立浪武浪者間將有）

云る谷を久良と云ふ古言の有ふ考合す可き者なり又思出けり〳〵ハ日本靈異記ふ間を志那太理久煩と有る志那太理ハ下之谷の義なるふ其ハを富登と云ハ合（凡）なる事傳九巻二十九丁ふ云るが如し此も谷を門と云るなり又西股間を麻多具良と云も膝谷と云事なて山ふ称けたるも人ふ号くる事〇間ハ阿比陀尓なり齋明天皇四年御紀大御歌ふ阿（飛鳥）須箇我播（川氷）漑（霧相）蟻羅毗都〻（往）喻矩（水）漑都能（間）阿比娜謨儺（無）倶毋（思）於毋保喻屢柯毋と有る四句を釋ふ無間也言無隙也と有ふ万葉四二十四丁ふ小山跡道之島乃浦廻尓縁浪間無年十一丁ふ（五懸巻者九）烏玉間開乍文三十五丁酢蛾島之夏身乃浦尓依浪間文置吾不念君又三十六丁風緒痛甚振浪能間無吾念君者文三十

△仁小今日間戀春鴨又戀間年經仁又

△十五年十小保登寺藝須安比大之麻思於家

△但其丘谷の上に一條小道小渡れり小ハ非す丘小上り谷小下りて這渡る事を云ふり然れバ八丘八谷と云へと也其ハ屈伸の長を云時ハ基こ大小して長き者をいふり

九丁 苅草乃東之間毛又 四十二丁 玉緒之間毛不置十二 二十丁 (小)無間思乎如何又 二十二丁 間文置而吾不念國十四 十丁 小安比太欲波佐波大奈利努乎又 三十五丁 於保ゝ思久見都ゝ曾伎奴流許能美知乃安比大 三十八丁 小余能安比太毋都藝底氏仁許武又 四十五丁 恵麻比都追和多流安比大ゝ小ちど有て間處(アヒト)の義ふり又名義抄小間字小種々の訓有小中小阿比太麻又阿比太無と云訓有る其下の麻と無(ヒ)ハ○蔓延を通音小て阿比太の下小間の言を添る ちり 波比(比)和多礼理と訓り古事記小ハ其長度綿八谷峽八尾而と有を合せて思小ふ其這度る長の事を(八)八丘八谷の間小係れりとちり篁蹤小蔓延大蛇蜿蜒之貌

△日本靈異記中卷小大蛇の事も腹行蛇轉と云ハ此小蔓延ゝ有と云ふり

△天淵記小八頭坂五石有葛根而蔓延長蔓五谷日天宮天蛇遺子也と云事有ハ此蔓延の字小就て語をあせて煮て取べゝきゝ事小あり

八丘八谷由八岐蛇而言其長大と有る是ふり△蔓字ハ万葉十 十四丁 小藤浪咲春野小蔓葛(ハフクヅ) 十一 四十丁 小山高谷邊蔓(ハヘル)在十二 二十五丁 小谷迫峰邊延(ハヘル)有玉葛今蔓(ハヘテシ)之有者年二不來友一云石葛今蔓之有者(ハヘテシアラバ)ちど有る是ふり又海宮遊行章第三ノ一書日小化爲八尋大熊鰐(ハニヒ)匍匐(ハヒ)透蛇と有る此同じ事を古事記小も化八尋和迩而匍匐委蛇と所見たるも此の例小近るり源氏夕顔巻小も出見むを道小てふむ通ひ侍る云ると云事も見ゆ西京賦小巨獸百尋是爲蔓延と云ひ卓氏藻林小蔓延連屬不絶也と有る字是ふり又呉都賦小地勢坤北丹木瑕蔓注小坤北地勢高下也草木盛長而蔓延瑕長也とも○古事記の此の文其長度綿八谷峽八尾而見

△身の腐爛れたりとも見る可き事下百十九丁草薙劍の所に云を見て知べきなり

△傳十九三品に注る如く大目類聚方に阿世依伊路依し有ハ汗阿延色阿延なるとも思ふ可し者

其腹者糸常血爛也と有を縁起ゐも右の蔓延於八丘八壑之間其腹皆爛壞と所見たり凡ての文体此と同じきを右の如く其腹皆爛壞の五字有ハ御紀ゐも當然ゐ本の有る事知るゐ其ハ丘谷を蔓延るとして常ゐ其身ゐ傷つけゐ形狀を云ゐり記傳ゐ其血字を知阿延と訓れたるハ抛草紙ゐ汗の出ゐ事を汗阿由流と云ひ又乳阿延受成ぬゐ乳母云と云ハ乳汁の出ず成ぬゐを云ゐり又住吉物語ゐも足より血阿延理云と有を血の出ゐ事を云ゐり又常ゐ血を令出ゐ事を血を阿夜加須と云ゐふ出字を書ゐ是ゐり爛ハ

(又彼御劍を尾中ゐ收藏し持てゐ故ゐ其人)

(古事談ゐ血阿由流と云ゐも共ゐ皆)

(空穗物語ゐ已ゐ多の血を指阿夜して云)

多陀礼と訓と右の爛壞ハ多陀礼夜夫礼多理と訓べ上百二十二丁ゐ註ゐが如く松柏の背上ゐ生たゐ山を載せて蔓延ゐ者ゐ有ければ其繩ゐ所より血出又其疵より爛れ腐敗たゐ由ゐり大同類聚方ゐ師内者多と爛礼連布玖敝礼美太乱利須と有ゐ美太利須と右の壞字と相當れり偖此の爛ハ四神出生章第九一書ゐ腹腹大高と有て太高の字を訓せたゐ事傳十二十七丁ゐ註ゐが如く又和名抄病類ゐ職文選風賦云得目爲職師説多と良女と有ハ爛目の義ゐり然ればハ多陀礼又多陀倍理又多陀良ゐど同言ゐして物の滿極ゐゐ

腫ノ誤カ

△又字鏡集ニ此字ヲ多陀流ノ由ヒ久又由和加須ノ訓ヲ猶名義抄ニ

事ニ称辞又ハ潮の湛ふちゴと云と等しく肉の高く起
り腐るを爛るとハ云ふ名義抄ニ爛字を美大流又
又都久又久都又ちゴ訓ミ爛字を多陀流又冨能冨又久佐流
多都又由流布と有て字を書別たれども爛共ニ同
字ニ有リ△又壊字を夜夫流又許賀流又
許煩流又加久流と有リ○又地神本紀ニハ此を時
八岐大蛇如所言蔓延於八丘八谷之間而至矣と有て
而至矣の三字有リ熟田縁起ニハ此と同ドウラズ
て此の上文至期（果）有大蛇（到）と云所を至期有大蛇到と
見えて到字有る事上百十六下ニ云ふが如し上ニ到字有
リ此ニ来（至）字有リ何れかしても一所ニ無てハ得有ま
じく所思るる（古典次ある及至得酒の所ニて聞く文ニ）ふ古事記ニも如此設備待之時其ハ俣

遠呂智信如言来と有る所ニ當れるを此ニハ甚く事
略て文を成されたる者ありけり○及至得酒（イタリテトノサケヲ）ハ酒袁
得流尓伊多理氐（と有れども今改めて酒袁登米伊多理氐）と訓ミ縁起ニハ及至得酒氣と有を
酒能香加岐氐伊多理氐と有る其ハ酒氣の薫馥（カヲリ）れる
ニ引れて来る義ありバ甚宜しきを此ニハ氣字無れ
バ然ハ訓べうざるあり然れども舊訓の任ニてハ
既ニ酒を得たる事ニ成れバ得字を登米と訓む時
ハ上二十六丁ニ云る故尋聲見往者と有ニ意味同ドキ所
ありニ合べく所思る故ニ今改めつ其ハ右ニ乃使脚
摩乳手摩乳釀八醞酒并作假庭八間（上）各置一口槽而盛

内閣文庫

酒以待之也と有ハ天淵記ニ尓素戔嗚尊計奇計と見
えたるが如く神策を設させ御在坐ケるが其御謀
計悉く小圖る所ニ當りて果して其大蛇なむ其酒を
認て來れる所なりけれバ得字必しも字流とハ訓ま
ドりけるを思ふ可き者なりけり

蛇の酒を好む事ハ常陸風土記ニ古老曰有兄妹二人兄名努賀毗咲時妹在室有人不知姓名常就求婚夜來晝去遂成夫婦一夕懷妊至可産月終生小蛇云々即盛淨坏設壇安置一夜之間已滿坏中更易瓮而置之亦滿瓮内如此三四不敢用器毋告子曰量汝器字自知神子我屬之勢不可養長宜從父所在不合有此云々臨決別時毎驚動取瓮投之觸神子不得昇因留此峰所盛瓮甕今存片岡之村其子孫立社致祭相續不堪と有を熟見るに小蛇を生るに依て始ハ坏中にて養ひ後ハ瓮に盛て生長しめたる由なる是なり白井宗因説に西

不勝怒怨欲震
殺伯父而昇天時

国立公文書館
National Archives of Japan